

〔古事記傳〕五腹は廣ヒロの意にて、原平ウラヒラなども同じ義なり、

〔古今著聞集〕博十二奏ウツまばしやすみ候はんとて、三十餘貫の錢取て、去りぞきにけり、傍輩共、女牛に腹

つかれたる心地してありけれど、略○下

〔太平記〕十高時并一門以下於東勝寺自害事

去程ニ高重走廻テ、早々御自害候へ、高重先ヲ仕テ、手本ニ見セ進セ候ハント云儘ニ、胸計殘タル

鎧脱テ抛ステ、御前ニ有ケル盃ヲ以テ、舍弟ノ新右衛門ニ酌ヲ取セ三度傾テ、攝津刑部大夫入

道道準ガ前ニ置キ思指申ゾ、是ヲ肴ニシ給ヘトテ、左ノ小脇ニ刀ヲ突立テ、右ノ傍腹マデ、切目長

ク搔破テ、中ナル腸手縷出シテ、道準ガ前ニゾ伏タリケル、

〔安齋隨筆〕前編八腹白腹黒古書に、腹白腹黒と云ふ事あり、腹は心腹とも腹心ともつゞけて、心

は胸也、即腹と云は、心を指して云、心清く正直なるを腹白と云也、漢土の書に、赤心と云に同じ、赤

はくらき事のなきを云、又心きたなくうしろくらきを腹黒と云、漢土の書に、黒心と云に同じ、

〔倭訓栞〕波前編二十四はらふる。和名抄に、痕をよめり、兼好がおぼしき事はぬは、腹ふる、

といへるは、東坡が忍事腹如囊といへる是也、出羽の俗は、腹がくつちいといふ、

〔新撰字鏡〕肉脊脊也、

〔倭名類聚抄〕身三體背 玉篇云、脊、跡反、和名背也、

〔箋注倭名類聚抄〕身二體醫心方、脊訓世奈加保禰略○中今本平部云、脊、背也、今作脊、慧琳音義引作

脊、背、脊、按說文、脊、背、呂也、呂即古文脊字、顧氏蓋依說文、則慧琳引作背、脊爲是、源君所見本、恐脫脊

字也、又按說文、脊、脊也、脊、背、呂也、呂、脊骨也、段玉裁曰、脊者背之一端、背不止於脊、如髀者股外、股不

止於髀也、據之背、宜訓世、脊、宜訓世、奈加、蓋背中之義、謂脊骨所在之處、然源氏物語謂末摘花女背

爲乎世奈加、乎世奈加、男背之義、則以背爲世奈加、與源君同、是後世之轉、非正義也、釋名、背倍也、在

脊背